
透彫の檻

A.Rosea

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

透彫の檻

【Nコード】

N8565H

【作者名】

A・Rosea

【あらすじ】

森の奥に佇む巨大な天幕は、多くの奇怪な姿の人間を檻に閉じ込めた見世物小屋だった。ある理由からこの見世物小屋に入団を希望した少年の、サーカス団員達との交流の日々が始まる。結合双生児、合成獣、人肉嗜食者、アルビノの少年…。平穏に蝕まれていく彼らの生活を、ある日突然打撃が襲う。

prologue (前書き)

マチゲリータPのボーカロイド楽曲『暗い森のサーカス』にインスパイアされた作品です。根本的な世界観は楽曲中の設定に酷似していますが、文章に登場する人物の設定、場所、ストーリーの多くは著者オリジナルのもので、す。
了承の上お読み下さい。

prologue

お通り中の皆様、お急ぎでなければここいらで少々、足をお止め下さいまし。

ハイ、この世にも奇妙なピエロの前まで、お寄りになつて下さいな。そこのお兄さんも少し見てつて下さいな。見物料はお取りしませんとも、タダですよ。ほうらタダで、後世までの語り草、不思議な不思議な見世物が、見れますよ！

はいはいよく見て。僕ら、こうして一つの胴体から、二つの頭が出てるんでございます。二人羽織とは違うんでございますよ、ほらもつと近くへ…そうら、あたしら顔が似てるのが分かるでしょう。ふふ、双子なんですよ。

親の因果が子に祟り、女親の胎内でくつついてしまった兄妹。今皆様の目の前に現れておりますが、僕らここへ至るまでに、涙涙の物語を辿ってきたのでございます。

いえいえ、お涙とともにちよつとばかりの金銭を、なんてつもりじゃありません。今はちよつとしたサーカスの宣伝ですから、足をお止め下さるだけでも結構ですんよ。あ、子どもさんには風船あげましょ。最後まで聞いてくれた子には飴付きよ。

さあ寄つて寄つて。世にも変わった形の人間、『二つ頭』の半生をお聞かせ致しますよう！

生まれたとたん母親に嫌われ、興行人に売られてしまった兄妹は、今日はシアター、明日はキャバレーと、2人分の胴体に2本の足でせつせと巡業。しかしながらどんなに儲けても、お金は支配人にかすめ取られてしまう。悲しいもんでしょ、こうなったのも親の因果の所為でさ。どうか皆様は、自分の子どもがこんなふう生まれないうつ、祈つて下さいまし。

まあでもね、見世物小屋をたらい回しにされてきたあたしらですが、今じゃそれなりに気持ちよく生きておりますとも。何故かつて

今の仕事場には楽しい仲間がいっぱい！ 『ドウ・サーカス』 っていうたら、皆様のこの中にも、ご存知の方はいらっしやるんじゃないでしょうかね。ハイ、おかしな奴らがたくさん、牛女の歌姫に、人魚姫、人間の肉を食べる狼男、他にもぞっとするような奴、面白可笑しい体の奴が、天幕の中でお客さんをお待ちしておりますよ！ あたしらの物語の続きは、今夜お客さんをお迎えする場所で、聞けますよ。ハイ、どうぞこの『二つ頭』に会いに来て下さいな。今夜この町の郊外、暗い森の入り口に看板が立っております。どうか森の奥への小径を辿って来て下さい。するとね…。

皆様を迎えるのは、不気味に月に照らされた、怪物のような大きな天幕！ 不釣り合いな愉快な電飾で、飾り立てておりますから、どうぞ足をお運び下さいませ。

ハイ、このビラお配りしますんで、目をお通し下さいな。そっちのお兄さんも。子どもさんには風船よ。妊婦さんにも飴付き風船、差し上げます。

今夜はどうぞ、『ドウ・サーカス』へ！ 奇人に忌み児、奇想天外な姿は世紀の光景でございます。一生の思い出に、どうぞお立ち寄り下さいませ。

はいはい、来たい方はビラを受け取って。時間も地図も、書いております。

場所は暗い森、暗い森。世にも奇妙な形の人間、皆様の目を楽しませましょう！

今夜は暗い森の奥で、皆様をお待ち致しております。

怖いもの見たい人、可笑しいもの好きな人、お立ち寄り下さい。
怖いもの見たい人、可笑しいもの好きな人、お立ち寄り下さい！
見世物小屋『ドウ・サーカス』へ！！

「あ、僕らと一緒に働きたい、という方も歓迎ですよ！
入団希望者がいましたら、お気軽に団員に見学をお申し込み下さいませ」

最後に彼がそう言うと、集まっていた人の輪に、冗談めかした笑いが広がった。

僕はその言葉を受けて、サーカスを訪れる決心をした。

第一章 1

夜になったところで、アパートを出た。

道具一式が詰まった黒皮の鞆を手に、街路を進む。冷えた夜風が頬に触れ、彼は空気の中に秋の訪れを嗅ぎ取っていた。

影のような街路樹が植わり、その向こうの道路を乗用車が行き交っている。反対側のショーウィンドウから煌煌と光が道に降り注ぎ、少年の歩く石畳を照らしていた。空は暗黒で、星は見えない。月は背の高いビルに隠れているのだろう。

彼は時間を気にする癖で、左手を上げて腕時計を見た。文字盤の短針は、円のいちばん下の文字から、左上に少し傾いた数字を指している。夜とは、黄昏を過ぎ、空がすっかり闇に浸食される時間帯から始まるものだ。その認識の元に、彼は逸る気持ちを抑えてこの時間に出発したのだ。

質素だが耐久性の良さそうな腕時計を嵌めた腕を下げる。くたびれた濃紺のレインコートに身を包んだ少年は、立てた襟から顔半分を出して、前方を見据えていた。

少年は黒い髪にオニキスの瞳、肌はごく一般的な白色人種のそれで、体格は痩せ気味だが中肉中背である。人ごみに紛れる平凡な少年に目を留めるものは誰も居ない。彼が下げている四角い鞆の中身が何かなど、想像しないだろう。

だが、唯一彼の素性が外見に現れているとすれば、それはその表情にだった。聡明で物事に動じないであろう、冷めた眼差しと弛みの無い精悍な顔立ち。色あせたコートを注視すると、すり切れたり破れたりした箇所を目立たぬように縫い繕う器用さにも気づける。同時に、彼が貧しい生い立ちで、義務教育を受けなければならない年齢にも関わらず、学校に通っていないということも。

単調に歩を進めていると、今自分を取り巻いている世界の何もか

もが、非現実的なものに思えてくる。

自分がどこへ向かっているか。それを考えると、彼は倒錯した、不透明な気分に陥るのだった。

行く当ての無い日々、ついに終止符を打つ時が来たのだ。ただ仕事を求め、居場所を探し、様々な場所を流れてきた。そんな自分がついに、流れ着こうとしている場所を、確かに見つけた。

だがそこは、この社会から外れた暗黒面の中にある一カ所。

それは、人の形を奪われ生を受けた者達が、唯一の住処とする場所。自分の体を見世物にし、見物客を驚愕させて収入を得るサーカス。

見世物小屋と、人は呼ぶ。今から自分は、その奇形人達の巣窟へと就職活動に赴くのだ。それが何を意味するのか、彼は自分なりに承知していた。

昼間、自分の見物客から情報収集したところによると、サーカスの団員達は檻の中に住まわされ、そこで見世物として見物客に曝されるのだという。不自由な体で陽気に芸を演じる者もいれば、世にもおぞましい姿、それこそ同じ人間とは思えないような化け物も収容されているとか。

はじめ少年は、その話がただの噂ではないかと疑ったが、情報収集の相手は実際にその見世物小屋を訪れたらしい。少年が冗談半分で、そのサーカス団に入団を申し込もうか考えている、と話したら、そのお得意の見物客は飛び上がった疑惑の目を向けた。あんた本気かい、あそこの檻の中に閉じ込められて人間もどきと共同生活なんざ、考えただけで気が狂いそうだぜ。いくら場数を踏んだあんだだって、肝を冷やすだらうて…。

見物客がそんな言葉を彼に浴びせた時、彼は心密かに思ったものだ。

どうでもいい、と。

少年は狭い地方都市の街路を、街のはずれの方まで来ていた。寂しげな住宅街の中の道を行けば、やがて郊外の森に至る。道行く人

の量は減り、比例して街灯の間隔も長くなっていた。近代化の遅れた都市の町中を、彼は無表情に、無感情なふりをして、渡り歩く。自分がその見世物小屋に入ったとき、どんな感情が訪れるかなど、どうでもよかった。

少年がその奇妙なサーカス団について思いを巡らすとき、そこに一切の私情は挟まない。否、感情が湧いてこなかった。他人との密接な共同生活がいかに窮屈であろうと、異形の者達に囲まれて暮らすことになるうと、彼は正直構わなかったのだ。少年はただ、自分の目的が達成できれば、それで満足だった。

それは、生きることだ。

給料、衣食住、安全。それらが満たされれば、どんな就職先であろうと構わない。ただ外部の人間に邪魔されずに身を置ける場所ならば、牢獄であろうと彼は好んで住んだだろう。そしてさらに、多少の身と思想の自由を許してもらえれば。

少年は自分の感情に無関心な人間だったのだ。感情が無いと言う訳ではないと思う。だが、衝撃を受けたり、動揺したりするときの自分は、表面的な心の一部分なのだ。彼の本心は、そんな人間らしい自分を、冷静なフィルターを通して俯瞰している。

一度入団したら、二度と浮き世に戻ることは許されないという、彼の見世物小屋の生活。

街頭で芸を行えば目を付けられるし、団体に所属しても誘拐の危険性は付きまとう。

ならば、いつそ一カ所に收容されようと、安定した生活が与えられる場所が望ましい。

自分の腕前を認められ、そこにいることを許されるのだから。

少年は、もう心を決めていた。手荷物は取りあえず仕事道具だけだが、これは自分の芸を確かめてもらうために持参した。入団を申し来み、断られる自信は無かった。むしろ、もしもそうするとしたら、断るのは自分の方だと思っている。とりあえず見学だけ願い出て、サーカス団内部を視察して気に食わなかった場合、見たものを

忘れて街のアパートに戻るつもりだ。入団を希望しているとはいえ、まだ自分の目で確かめた訳ではない。一生の身の置き場になるかもしれない場所を、果たして本当に身を預けられるのか、入念に調べ込む必要があるのだ。

周囲の景色は街灯がまばらになり、前方の地平線上に黒い大きな固まりが見えていた。乗用車の吐き出すガスの熱気と臭いは消え、代わりに湿った土の匂いがしている。周囲に人工の光が無くなったため、空には星屑の消えかけた輝きを確かめることができた。

だが、心が決まっただけで目的も確かなはずなのに、何故か彼の精神の水面は泥濘が舞い上がったかのように不透明だ。掻き乱されたように倒錯した感情が去来する。いつもそうだ。人間らしい感情を持つ自分を俯瞰している冷徹な心の持ち主の自分、そしてそんな無感情な自分を疑問に思うまた別の自分が居る。そう、彼は疑問なのだ。何故自分はそのような場所に行かなければならないのか。何故社会の影に隠れ住むことを希望するのか。それで本当に自分は満足なのだろうか？ このまま一生が終わってもいいと、本当に思っているのだろうか？

だから彼は居場所を点々としてきた。そして考えてきた。動揺することは無い。だが、常に疑問を抱く。自分はどこへ行くのか。自分は何者なのか。何のために生きたいと願っているのか。

見世物小屋。待遇が良ければ後のことは気にしない。そう物質主義な自分を装って、彼自身の本心を誤摩化しているのだ。なぜなら、そうしなければ生きていけないから。立ち止まって、考え込んで、感傷に浸るなど。自分にはできはしない。だからそうしようとしている自分を普段は隠し、生きる術を掴むことに専念するのだ。

少年が今行く道に、目的地は同じに違いない、まばらな人の列ができていく。大きな間隔で少人数の固まりが点在しているが、皆確かに、前方の寂しげな電飾に彩られた看板の示す先を目指している。黒いコートを羽織った少年は、闇に紛れながらその看板の前まで至り、その文字を横目で読んだ。確認すると、舗装の曖昧な森の中

の小径に足を踏み入れる。

『ドウ・サーカス この先 小径を真っ直ぐ!』

両側に森の木々の幹が迫った、乗用車一台が通れるほどの小径。星屑のばらまかれた空は高く遠く、生い茂る木々の葉によって細長く狭められ、小径の上には幻想的ともいえる自然の天蓋が作られていた。あるいは退廃的か、普通の人間だったら恐怖の前兆のように感じるかもしれない。少年はこういった景色が好きだった。

森の入り口から歩くこと数分、彼は闇の中にちらついていた小さな色とりどりの光の正体を、はつきりと確かめることができるようになった。

大きく開けた場所に、表面がのっぺりした建築が立っているのが分かる。ここの住人は強い照明を好まないらしく、そのテント全体の大きさやその容姿をはつきりと把握できるほどの光源は用意されていなかった。黒い葉を持つ木立に囲まれて、その巨体はひっそりと鎮座している。

細い川が湖に至るように、木立の中の小径からその空き地へと出る。十数メートル離れたところにあるテントの入り口から、太い見物客の列ができていて、少年はその最後尾に立った。まだ今夜のサーカスは開幕していないらしい。そんなに待たせられはしないだろうと思いつながら、彼はこの大きな見世物小屋を観察する。

トロールが何人も暮らしていそうな、怪物じみたテント。森の奥に隠れ潜むように立ち、だが訪れる客は全貌の知れない巨体でもって威圧する。その中に抱えている者達の素性を表しているようだった。天幕を、ちかちかと目につく電飾が飾っている。無表情な天幕と是对称的に賑やかなのが、子ども騙しのようどこか不気味だ。電飾は、街で売られている、イベント用の凡庸な雑貨。ふと、少年の脳裏にあの双子の姿が浮かんた。ちょうど先週の昼間街頭に立ち、自分らのサーカスの宣伝をしていた。『二つ頭』が、彼らの年相応のセンスで飾り付けたのかもしれない。

あれから一週間が経ったのだ。すなわち、少年が見世物小屋『ドウ・サーカス』への入団を考え始めてから、ということになる。サーカスが開くのは、毎週休日前の夜だけ。その昼間だけだろう、団員達が宣伝のために檻の外へ出ることを許され、一般人の社会である街に立つのは。

このテントはお菓子の家のようなのだ。少年は一瞬で妄想を駆け巡らせる。

人々を巧みな口上で森の奥へと誘い、絵本から飛び出したような出で立ちのテントで出迎える。きらきらと輝く電飾は、幻想の成れの果ての陳腐なおもちゃだが、人々はその中にあるものに惹かれて止まない。一度入ったら、出口まで滞ること無く見世物達の檻の間を巡らされ、やがて魔力にあてられたように見ることに夢中になる。立ち止まったら最後、出口へと導かれることは無い。檻の前で目を奪われている隙に、背後から大きな袋をかぶせられるのだ。巨体の男が見物客が入ったずだ袋を担ぎ、テントの奥へと連れて行く。そこで足を曲げられ手を折られ、あるいは何か別の生き物の体の一部を縫合され…。

どこかで聞いたことのある話だった。見世物小屋に行つては行けないよ。親が子を戒めるために使う作り話。無力な子どもは攫われ、暴力によって体を改造され見世物として檻の中へ。一度入ったら出られない。あくまで根拠の無い想像だが…。

案外本当の話かもしれないな、と少年が思っている、あまり離れていないテントの、幕の一部が派手な衣擦れの音とともに裂け、たちまち大きく開かれた口のような入り口が現れた。ちょうど入り口の幅は、前にできた人の列と同じくらい。中の幕の色は赤で、使い古されたのか褪せていたが、暗い森の色彩や天幕と相まって、その瞬間はとても鮮やかで眩しくさえ見えた。突然テントの中から溢れ出した強い光に、少年を含め見物客は皆目を細めていた。

入り口の奥から現れたのは、黒装束のひよろりとした男。普通のサーカスのピエロとはかけ離れた格好だが、中身はそこのピエロ

よりもよほど上等な芸人ということが分かるほど、並々ならぬオーラを発していた。彼が見物客の前で丁寧におじぎをすると、その力リスマめいた動作に客はたちまち惹き付けられた。魔法をかけたのだな、と少年は心の中呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8565h/>

透彫の檻

2010年10月9日11時14分発行